

聖書箇所：ルカの福音書 5章 12～16節

説教題：わたしの心だ。きよくなれ

1 なぜこのように告白できたのか

前回の箇所で、イエスがペテロに向かって「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」と言われた場面が出て来ました。ペテロは最初こう言います。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした」と強く抗議しました。けれどもその後、「でもおことばどおり、網をおろしてみましよう」と言うのです。この「でも」が、ペテロの人生が大きく変えられるきっかけになりました。いったいなぜペテロは「でも」と言えたのでしょうか。考えてみれば不思議です。

今日の箇所では、全身ツアラアトの人が「主よ。お心一つで、私をきよくしていただけます」と言います。このことばで、この人の人生が大きく変えられます。そんな重みのある大切な告白を、なぜ、この人は言えたのか。今日はそのところに焦点を当てて考えていきます。

2 イエスが向かわれたところ

12節に、「イエスがある町におられたとき」とあります。「町」ということばから、私たちはすぐに想像します。イエスは人々が多く集まるような町の広場とか集会所のようなところにおられたに違いない。本当にそうでしょうか。

ここに「全身ツアラアトの人」が登場します。ツアラアトとは何か。以前の聖書では「らい病」と訳されていました。しかし旧約聖書

をよく見ると、「らい病」では説明がつかない箇所がたくさんある。それで新しい翻訳では、「らい病」ではなく、もとのことばの発音のまま「ツアラアト」に直しています。そこあたりの事情については、第三版の聖書の一番最後に説明があります。

それはそれとして、レビ記13章を開くと、ツアラアトの診断基準のことが細かく書かれています。もし不幸にしてツアラアトと診断されたならどうなるのか。レビ記13章45、46節。「患部のあるそのツアラアトの者は、自分の衣服を引き裂き、その髪の毛を乱し、その口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ばなければならない。その患部が彼にある間中、彼は汚れている。彼は汚れているので、ひとりて住み、その住まいは宿営の外でなければならない。」

宿営の外とあります。普通の人を訪れる場所ではありません。わざわざ来る人がいても、それは怖いもの見たさ、好奇心を満たすためでした。

親たちは子供たちに教えたでしょう。「絶対に、あそこにだけは近づくな。あそこは汚れた者たちがいるところだから。」人も忌み嫌う場所です。ツアラアトの人はそこにいました。イエスは、町の真ん中ではなく、汚れた者が押し込められている場所に向かわれたのでした。

3 汚れた者の告白

(1) きよくしてください

ここに押し込められていた人たちも、イエスのことを噂で聞いてははずです。病気で弱っていた者が、イエスの手に触れられただけでいやされていった。そのような話しを聞けば、だれでもイエスのところへ出かけ、イエスにいやしてもらいたいと願うでしょう。実際に、大ぜいの人たちが集まってきたのです。しかし、汚れた者となり、町の外にしか住めなかった人たちはどうなのでしょう。町には行けません。この人たちは初めから希望を持つことさえ許されないのです。イエスの噂を聞いても、自分とはまったく関係のない、遠い存在なのだと思わせるしかありませんでした。

そのイエスが、今、目の前に立ってくださいました。目を疑ったでしょう。まさかと思っただけでしょう。最初は声も出なかったかも知れない。でも夢ではありません。現実でした。

彼は、イエスを見るなりひれ伏してこうお願いします。「主よ。お心一つで、私をきよくしていただけます。」

もう少し原文に即して訳し変えてみます。「もしあなたがお望みでしたら、あなたは私をきよくすることがおできになります。」考えてみると、不思議なことばです。私たちなら、「どうかこの病をいやしてください」と言うはずですが、ところがそうではなく、「きよくしていただけます。」なぜこうなのでしょう。

この人はツアラアトという病に苦しんでいました。でも、さきほどのレビ記を見てわかるとおりに、実は健康であるとか病気であるとかが問題なのではないのです。汚れているのかそれともきよいのか、そのことが問題だったのです。汚れた状態の一つとして、

ツアラアトという病気があるに過ぎない。この人は自分がなぜ苦しまなければならなくなったのか、その本質をとらえていました。病気が問題なのではない。汚れていることが根本的な問題でした。だから言うのです。「お心一つで、私をきよくしていただけます。」

(2) なぜこのように告白できたのか

でもまだ不思議さが残ります。どうしてこの人は「あなたがお望みならば」と言ったのだろうか。もっと激しく積極的に、「きよくしてください！」と叫ばなかったのはどうしてでしょう。

今イエスはツアラアトの人の前に立っておられます。どんな思いで立っているでしょう。「さあ、今わたしはあなたの前に来ましたよ。あなたはなんと仰いますか。」少し距離をとるような、そんな態度だったのでしょうか。

でも、イエスがこの人のところに来られた目的は何でしたか。この人を救うために来られました。であるならば、ただじっと相手は何を言い出すのか黙って待っているはずはないでしょう。イエスはこの苦しんでいる人を何が何でも救いたいのです。極端な言い方をすれば、救うためならどんなことでもします。いったい何をされたのでしょうか。ここは想像ですから、あるいは違うかも知れませんが私はこのように思うのです。

この男性はイエスの前にひれ伏します。ひれ伏す前、まじまじとイエスの御顔を見ることができました。その表情はどんなだったのでしょうか。もし不機嫌な顔であったり、冷たい視線を感じたなら、何かを言えますか。言えません。しかし反対にイエスがあわれみに満ちた表情で、今にもこの手を差し伸べよう

とされている。そうであったならどうですか。そして、イエスの口元には、「わたしの心だ。きよくなれ」そのことばが吐かかっている。いや、もうイエスのまなざしの中にいままきに口に出そうとしていることばが見えるようであったならどうですか。もちろん実際に見えたのではありません。心の目で見えたということです。

それまでは、自分が苦しんできた長年の思いと願いをぶつけなければ気が済まないと思っていました。「絶対にいやしてもらいたい。何が何でもこのチャンスを逃してなる者か。」幸いをつかむために、がむしやりに、必死に願うべきだと思い込んでいました。けれども、イエスのまなざしを見たとき、そんな怒りのあせりはどこかに消え去り、言うべきことばが変えられました。イエスの心の中にあることを自分の告白として語ればよい、そのことに気がつきました。

「もしあなたがお望みでしたなら。」自分の願いをぶつける必要はない。主のみこころにゆだねるだけなのです。そのようにして、心には平安が与えられていきました。

(3) 祈りの不思議

12 節の告白を見ると、祈りの不思議さということをおぼやされます。

私たちは何を祈ればよいのかかわらないとこぼします。どのように祈ればよいのかかわらないと言います。どうしたらうまく祈れるようになるのでしょうかと尋ねられることもあります。

私たちはともすると、この方の表情を見ることをせず、この方のみおもいを知ろうともせず、ただ自分の願いだけを次から次へとしゃべり続けていただけではなかったか。

しかしそうではない。祈りも、信仰告白も、私たちが努力してすることではなかった。みんな、イエスが私たちに教えて下さる。この方を見ればいいのです。祈るべきことばはみなこの方の御顔にあることを覚えたいと思います。

4 神のみこころ

ついでに言えば、祈るときは大胆に祈りなさい、と言われることがあります。しかし、ツアラアトの人の祈りはまったく大胆ではありません。非常にささやかで控えめな祈りに聞こえます。そんな祈りでは神は動かされないのでしょうか。もちろん、そんなことはない。

イエスは手を伸ばし、彼に触れられます。ツアラアトの人に触れただけで、触れた者は汚れると信じられていました。ですから、この人は何十年も人に触れたこともなければ、触れられたこともありませんでした。でもイエスは触れられます。そしてこう言われます。「わたしの心だ。きよくなれ。」もつと原文に即して訳せばこうです。「わたしは願っています。だから、あなたはきよくなりなさい。」

ツアラアトの人の告白と、イエスのみことばを比べると、まるでオウム返しのようなので、なぜそうなのか。先ほど触れたとおりです。ツアラアトの人が、イエスの中にあるものをそのまま語っているからです。

ここを見ても、人が救われるのは人間の努力や考えではなく、まさに神の側からの一方的な恵みであることを教えられます。

今日の箇所は、聖さとけがれということが大きなテーマとなっています。

私たちはこの汚れのことをどこまで自覚

していたでしょうか。ツアラアトの人のことを見ても、自分には関係がない人、そんなふうに思っていたでしょうか。でも、神の目からご覧になればどうですか。私たちとツアラアトの人とどこが違うのですか。まったく同じなのです。そうであるなら、私たちの祈りはどうなるのでしょうか。「主よ。お心一つで、私をきよくしていただけます。」実は私たちの深いところにある願いはこの告白なのだろうと思うのです。

自分の罪や汚れをふり返ると悲しくなります。こんな私は救われないと落ち込みます。こんなに汚い私を神はご覧になり、怒っているに違いない。神は私のあの罪この罪のために罰を与えるに違いない。そう思うことがあります。

しかし今日の箇所を見るとどうですか。神は汚れた者に怒りを下し、罰を与えましたか。その反対です。イエスは手を伸ばし、触れてくださる。触れたとき何が起きたのでしょうか。変な言い方に聞こえるかも知れませんが、この方は触れた手で汚れた者の罪を吸い取り、ご自分の罪とされるのです。聖い方が罪と汚れを背負われます。それがどれほどイエスにとって苦しいことか、私たちは鈍感で気がつきません。「この方は神だから、私たちをきよめることができる。」そんな通り一遍の言い方で片付けます。

でも、きよめられた罪はどこに行ったのですか。消えてなくなったのですか。いいえ。きよめられた罪はすべて主である方が背負っておられます。私たちはこの方に私たちが負うべき十字架を負わせていたのです。

でもこの方は言われます。「わたしの心だ。きよくなれ。」それが私たちに對する主の願いだと教えて下さいます。私たちの罪を喜ん

で引き受けてくださった主に感謝いたします。